

江古田小校長室便り 「温故創新」

H30(2018)・0226 NO102

校長 伊波喜一

圧巻の 技を競わん 厳冬の 異体同心 要なるかな

第23回冬季オリンピック競技平昌大会が幕を閉じた。日本は過去最多13個のメダルと43人の入賞を獲得した。入賞の有無に関わらず、アスリート達がお世話になった人達への感謝の言葉を口にしていたのが印象的だった。スポーツであれ学問であれ、一つの道を貫くことは容易でない。今回、大輪を咲かせたアスリート達が4年前のソチオリンピックを教訓としているのも、特徴の一つだ。ソチでは期待がかえって重荷となり、その重圧に押しつぶされたと話していた。プロのアスリート達でさえ、平常心を保つことがいかに難しいか分かっていうものだ。この4年間、自らの限界に挑み・耐え・積み上げた先に得た成果は、揺るぎなき自信となるだろう。皆、異口同音に「あの時は、自らへの追い込みがたりなかった。自分の力を引き出せていなかった」と語っていた。アスリート達が最後までやり抜けたのは、向上心と忍耐力に加え、成長の手応えを感じたからに違いない。その手応えは、黙々と続ける労作業を認め・支え・ねぎらう陰の人がいたからこそ、ではないだろうか。